

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005
東京都東大和市高木 3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU!

2019年(平成31年)4月16日 火曜日

無料

第83号

毎月発行

発行 2019年(平成31年)4月16日 火曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、65歳、経営
コンサルタント、趣味は縄
文研究、今年1月に『東北先
史時代学』を提唱、東北から
日本を変えることを標榜。
また縄文遺跡保存活動とし
て郷里の涌谷町の『長根貝
塚保存活動』開始。映像プ
ロデュース事業にも進出。



『涌谷7000年の歴史』 涌谷で上映(3/24) 一日上映にもかかわらず来場300名を超える 5/6には三鷹で東京上映会実施予定

宮城県北部にある涌谷町の七千年の歴史を5つの歴史遺産(下記の映画パンフレット参照)で表現した映画『涌谷7000年の歴史』を、三月二十四日、涌谷町公民館で無事上映することができました。

午前の部、午後の部二回の合計三回の上映でした。中学生以下無料として、中学生の来場を期待しましたが、ほぼ全員とってよほど、大人ばかりでした。とはいえ、六五歳の新人映画監督である筆者の第一



会場はほぼ満席

作でしたが、おかげさまで、一日限定上映にもかかわらず、御来場者数300名を超えました。開催者としての感想としては、ふさわしくないかもしれませんが、涌谷町民、並びに涌谷出身者、関係者の方々の関心の高さには非常に驚きました。ご来場いただいた皆さまには、この紙面を通して、



『涌谷7000年の歴史』DVD

感謝申し上げたいと思います。また、さらにありがたいことに、たくさんの方から「よかったよ」と声をかけていただきました。

映画製作も初めて、映画上映も初めてで、上映機材がうまく作動するか、途中で映像がストップしたりしないかということばかり気にしておりましたので、そうしたお声をかけていただき、まさに不意打ちの喜びが湧いてまいりました。同時に、地方のさびれ行くまちの歴史掘り起こしは必要なのだとあらためて感じた次第です。そしてまちに誇りが持てることはまちの活性化には不可欠だとあらためて思いました。やってよかった。これからもこの路線を継続してまいります。

と思った次第です。

この涌谷町は、奈良天平時代に日本で最初に金を産出し、東大寺の盧舎那仏の鍍金用に用いられたことで知られているまちですが、まちの古い歴史で知っていることといえば、金だけというまちでした。しかし、この映画でそれだけではないことをお知らせできたことはとても良かったと思います。

また、日本初の金が出たことだけを中心にした金産出礼賛映画にはしませんでした。金の産出をきっかけに、古代東北が朝廷に侵攻されていく過程の緊迫した古代のドラマが伝わるように構成しました。

製作途中では、そのストーリーがまちの人々に受け

入れられるのか非常に不安でしたが、やはり歴史の真実は伝えなければならぬと覚悟を決め、知られざる歴史の一面を真正面から提示することにしました。また、古代、この涌谷町近隣はエミシが多数暮らす場所であったにもかかわらず、さらには、かつて『海道蝦夷の反乱』というエミシの蜂起があった後に出来た、反乱エミシの町であり、その後涌谷町は進んで朝廷に協力したということも提示しました。

ある意味で朝廷の手先となつて、朝廷に貢献した複雑な対応が焼きつけられたと思います。映画の企画段階ではまったく考えておらず、思いもよらない展開となっていました。また、この映画は、町の教育委員会の全面的な協力をいただきながら完成しました。また地元の高校生やたくさんの方々が出演する、まちぐるみで作上げた映画でした。笹峯寺の貫主さんにも、

歴史ドキュメンタリー映画『涌谷7000年の歴史』

2019年3月24日(日) 3回上映 会場：涌谷公民館(交通券無料)
午前の部：10:30-12:10 各回、200名定員 予約不要・先着順
午後の部：13:00-15:30 入場料300円(税込) 中学生以下無料
夜の部：18:30-20:30 DVD上映会(全席別席制) 2000円(税込)

涌谷には7000年の歴史があります。縄文、弥生、古墳、奈良、平安以降江戸時代、そして近代に続く連続した歴史。さらにこのまちには1270年前、日本で最初に金が採れ、東大寺の大仏鍍金に使われました。しかしその金産出は、それ以降の涌谷も、東北も、日本も大きく変えていくことになりました。

涌谷教育委員会、天平ろまん館、蓮華寺、涌谷高校等による涌谷町挙げてのご協力でお集まり、涌谷町民が多数出演する映画です。涌谷町自身の協賛の新人映画監督・砂越豊によるプロデュース作品。問合せ先：株式会社遊無有 Mail: yumuyu@wj8.so-net.ne.jp



『映画パンフレット』

巨理家の十八代当主にもご出演いただきました。各シーンで特筆すべきことの第一は、縄文遺跡である「長根貝塚」のシーンの未公表の発掘物を多数「出演」させたことです。なかなか目にできない発掘物群でした。

また、追戸横穴古墳のシーンでは、許可を得て、古墳内部の撮影からシーンが展開するという構成としました。

古代の涌谷のたたら製鉄について触れたことも意義あることと思っています。そんなことで、涌谷町民にも知られざる歴史を公にできたのではないかと思います。

上映後、宮城県涌谷町出身者で東京圏在住の方々の会の方から、映画は、東京でいつ上映するのかとご質問が寄せられました。ほかに東京での上映を楽しみにしておられる方々がおられました。

そんなに上映が期待されるとは思っておりませんでした。が、とてもうれしいこととであり、早速会場探しをしました。

東京上映は五月六日、三鷹市にある三鷹産業プラザで上映予定です。ゴールデンウィークの最終日です。

また、ノーカット版のDVDも、上映後に数多く注文が寄せられていて、ありがたいかぎりです。

『涌谷7000年の歴史』 東京上映会のお知らせ

宮城県北部の小さな城下町の涌谷町には実に7000年の歴史があります。その歴史を掘り起こした映画『涌谷7000年の歴史』を、ゴールデンウィークの最終日の5/6(月)に三鷹産業プラザで上映します。午前一回、午後二回の合計三回上映します。入場料はワンコイン、税込500円です。65歳の新人映画監督の砂越が企画し製作した初めての映画となります。過疎化が進行する地方の小さな町の活性化に少しでも役に立ちたいと思い、映画製作はまったくの未経験でしたが、挑戦しました。また、涌谷町のたくさんの方々にご出演いただき、またご協力いただきながらようやく出来上がった映画です。すでに宮城県涌谷町では3月24日に上映済みです。たった1日の上映でしたが、予想外の300名超の方々のご来場をいただきました。詳細は下記要領をご参照ください。たくさんの方々のご来場をお待ちしております。

記

日程：2019年5月6日(月) 一回目 10:20～12:00
二回目 13:10～14:50
三回目 15:00～16:40

場所：東京三鷹市 三鷹産業プラザ7F 701号室 定員等 各回 60名

ご冥福をお祈りします

涌谷公民館での映画上映の際に来賓のごあいさつをいただいた涌谷町長さんが亡くなるというニュースが4月初めに飛び込んできました。あまりの突然の事態に驚き、悲しみ、事態をどのように受け止めてよいか戸惑うばかりでしたが、ご冥福をお祈りいたします。

今年1月には、人口減少や少子高齢化に伴って将来的に財政破綻の懸念があるとして、「財政非常事態宣言」を出したばかりでした。地方のまちの財政的窮状はまさに待ったなしの状況に至っていることをあらためて思い知らされました。



第56回

水産業再興のための
料理レシピ紹介

《カレイの煮付け》
日常でもなじみの
魚のカレイです。
卵もたくさん！
みなさん、気軽に
挑戦しましょう！



郷土料理愛好家
松本由美子氏

『材料』 カレイ 2切れ、みりん 大3、砂糖 大3、醤油 大3、料理酒 大3、生姜 少々、ネギ少々、水 100cc

『作り方』 (1) カレイに切れ目を入れ、火の通りをよくします。(2) 水に調味料を合わせ、ひと煮たちしてから、生姜のスライスとカレイを入れます。(3) 強火で煮たったら、アルミホイルで落とし蓋をし、中火で煮ます。(4) 後半、煮汁を切り身に軽く掛け回し、火を止め10分程、味を含ませます。(5) ネギなどを煮含め、添えます。

—第38回 三陸酒海鮮会—

今回は東日本大震災から8年という節目ということもあり、絵本セラピストとしても活躍している早川さんの絵本読み聞かせも実施しました。岩手県大槌町が舞台の「かぜのでんわ」という絵本でした。電話線が繋がっていない電話ですが亡くなった人と話せる電話なのです。動物たちが登場する絵本ですが、たくさんの犠牲者の方々を思い起こさせる話です。こうした形で東日本大震災の犠牲者の方々を追悼することもいいなと思います。続けていきたいですね。読み聞かせのときは静まりがえていましたが、いつものように三陸海鮮と東北地酒で盛り上がり、二次会直行でした。次回は6月1日です。



東北地酒ラインアップ



読み聞かせ・・・「かぜのでんわ」



写真でお伝えする
東北の風景

春の鹿

写真撮影 尾崎匠



平谷美樹「義経暗殺」が面白い

義経の死を題材にしたミステリー

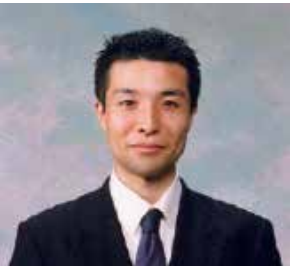
ミステリーという小説の一ジャンルがある。謎が謎を呼び、最後に全ての謎が解き明かされるといふスタイルである。このスタイルを貫徹するために、その舞台は作者によって隅から隅まで作り込まれる。当然、その舞台は現実世界とは異なる架空のもの。だから、仮にその舞台が歴史上の一時代のものであったとしても、その舞台は実際の歴史とは異なる架空のものである。ことがほとんどであった。

博覧強記の実在の人物が主人公

主人公の設定も秀逸である。本書で「謎解き探偵」の役を担うのは、これまた実在の人物である。その名も清原実俊。鎌倉幕府の公文書である『吾妻鏡』に、次のようなエピソードとともに登場する。奥州藤原氏を滅ぼした頼朝は、奥州藤原氏が支配していた陸奥出羽両国の台帳や土地・年貢を書き出した田文を取り寄せようとしたが、それらが平泉館と一緒に焼失してしまっていた。

執筆者紹介

大友浩平 (おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
<http://blog.livedoor.jp/anagnasi/>



Facebook
<https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo>

土地の古老に誰か知っている者がいないかと尋ねたところ、その古老は豊前介実俊とその弟の橘藤五実昌なら知っていると言った。そこでその兄弟を呼び出して詳しく尋ねたところ、二人は確かにその内容を全て記憶しており、書き出して頼朝に提出した。余目一か所を書き漏らした以外には全く間違いがなかったため、頼朝は大いに感心して、二人をすぐに家来として仕えさせた。

実在の人物としても、広大な陸奥出羽両国を管理する文書の内容を全てそらんじていた博覧強記の人物として記録に残されているわけだが、本書ではこの豊前介実俊こと清原実俊が探偵役に抜擢されている。ちなみに、小説の中では、実俊は頭脳明晰だが剣の腕前はからつきし、弟の実昌はそうした兄の弱点を補うかのような剣術の達人として描かれている。

謎が謎を呼ぶ歴史ミステリー

物語は、義経が妻子を殺害し自害した姿で見つかるというところから始まる。史実でもそう伝えられるが、小説の中では、それが起きたとされる1186年の旧暦閏4月30日の3日前という設定である。奥州藤原氏四代目の御館泰衡は、その現場の状況に不審な点があると考え、清原実俊に真相究明を命じる。以下は、その紹介記事は「1186年、兄頼朝に追い詰められ、平泉に逃げ込んだ義経。頼朝の圧力を受けて、奥州藤原氏・泰衡が衣川で義経を討ち取ったというのが歴史の定説である。しかし、この物語は通説を覆し、義経が妻子とともに自害したところから始まる。ただ、自害とするには現場の状況、義経の心理面などを洞察すれば不自然なことも多い……この謎に『吾妻鏡』に驚異の博覧強記としてその名が上がる。

「頭脳の人」清原実俊が挑む。中級の文官である実俊だが、たとえ泰衡相手でも強気の姿勢を崩さない豪放な性格である。それを苦心して諷めているのが従者の葛丸(男装しているが、実は女性)。泰衡、頼朝の刺客、慶、藤原一族。実俊がさまざまな「容疑者」を調べ、推理していく、傑作歴史ミステリー小説。

謎が謎を呼ぶまさにミステリーの王道を行く展開である。そしてまた話は義経が平泉に逃れて半年後に突然亡くなった先代の秀衡の死の真相にも迫る。そしてその翌年2月に秀衡の六男頼朝が殺されたその訳とは。史実通りに事態が展開していく中、謎を盛り込んでいく作者の構成力は実にお見事というほかない。

もちろん、奥州藤原氏と弁慶を始めとする義経郎従との合戦(衣川の合戦)、頼朝の奥州侵攻と奥州藤原氏の滅亡(文治五年奥州合戦)も避けられない現実として、この小説の中でも起る。そしてまた秀逸なのは、その裏にあったものについて、作者は歴史ミステリーの形を取りながら、敗者の心中をしっかりと語らせていることである。

清原実俊の御館泰衡に対する温かい視線や、泰衡が決して凡愚な君主としては語られていない様子には、取りも直さず作者の泰衡に対する視線が表れている。家督を継げなかつた長男国衡にその思いを語らせているところも実に面白い。また、蝦夷を母に持つ国衡には、それだけでなく、奥州人としての思いも語らせているのも興味深い。

東北人としての叫び

作中では、主人公清原実俊は景迹(きょうじやく)という推理の達人として描かれている。特に、初対面の相手に対して、実俊は「プロファイリング」を行う。御館泰衡に対してはこうである。

「国のためなら己を滅する。己の感情よりも、まず国の利益になるかどうかを考えて、あるべき御館の姿を演じている。」「度量が大きく何事にも動じない。威厳がありながらも偉ぶることをせず、腹の立つ態度をとるおれのような者の言葉も辛抱強く聞き、目まぐるしく頭を回して相手の真意を読みとろうとする。己が賢いことを知っているが、その限界も知っているゆえ、おれに相談しに来たか。うむ。確かにおれの方が汝より賢い。」

泰衡はその言葉を、実俊の景迹の通り突っ叩くが、それ以外の登場人物は例外なく怒る。しかし、その登場人物も極めて魅力的に描かれている。御館泰衡はもちろん、国衡、忠衡、家臣の長崎太郎(これまた義経記に登場している)、そして最初は主人公に「帝に仕えるよりも平泉藤原家と結んだ方が美味い汁を吸える」と思っていた狡っ辛いやつとけちんちゃんに酷評された藤原基成さえも、最終場面では主人公清原実俊に対して温かいまなざしを向け、的確なアドバイスを送る人物として描かれる。

これに対して、頼朝、梶原景時の描かれ方と言ったら……。作者の平泉に対する並々ならぬシンパシーが感じられる。作中で実俊は陸奥出羽両国の未来についてこう予測する。

「平泉藤原家が源九郎を匿ったことを理由に、源二位が攻めてくる。そして、平泉藤原家は滅びる。庇護者を失った出羽、陸奥国は、俘囚の国よとさげすまれ、常に搾取されるばかりとなる。百年、二百年、千年たつてもそれは変わらぬであろう。平泉は、出羽、陸奥国は、衰退し、いずれ鎌倉に劣る田舎となる。ただただ米を、馬を牛を、都へ送るために存在する国となり、住む者たちは奴婢と同様に扱われるのだ。」



そして、「考えなければならぬのは、これから先、当来(未来のこと)だ。」「出羽、陸奥の民がこれから歩まなければならない修羅の道には、灯りが必要だ」と強調する。

その「灯り」が何だったのかは本書を読んでいただくとして、その主人公の叫びは作者そのものの叫びだったのである。作者の平谷氏は岩手県久慈市の出身である。同じ東北に住む一人として、奥州藤原氏を滅ぼし、奥羽を我がものとした頼朝に対するモヤモヤした感情はある。他にも東北に住む少なからぬ人が恐らく、多かれ少なかれ同じ思いを持っているのではないかと想像する。本書でも、奥州藤原氏の滅亡を目の当たりにした主人公にそうした思いを持たせていることにも共感が持てる。そして、その張本人である頼朝の最期(それも記録に残っている内容だが、そうした

主人公の復讐心の結果だったのではと想像させる記述になっているところも、東北人としては溜飲が下がる思いもした。本書の裏表紙の記載は、「百年の平和と映画を誇る奥州平泉にとって、落ちのびてきた源義経はまるで疫病神であった。新たに派遣を握った源頼朝が、追討令が出ていた義経を口実に、奥州藤原氏を潰しにかかるは必定」。対応を巡って意見が対立する中、突如として義経は死んだ。あたかも妻子を伴ったの自害に見えるが……。平泉の天才文官・清原実俊が、従者の葛丸らとともに真相解明に乗り出す。運命に翻弄される者たちの熱誠が胸を打ち、恐ろげき真実が結末に待ち受ける。歴史ミステリーの傑作がここに誕生！」

この文章にそそられた人にはぜひ、ご一読をお勧めしたい。

『鶏と東北の不思議な関係の事』

新年の始まりから少し経った小正月、私は今年も大崎八幡宮の「どんと祭」を訪れていた。全国的にも知られるという当社におけるどんと祭の魅力は、役目を終えた多くの正月飾りを焚き上げる大きな火の山の暖に当たる悦びの他に、境内にずらりと並んだ珍しい出店群が醸し出す幻想的な雰囲気、また暗い寒空の下精一杯楽しむ大勢の参拝者たちの姿に見る、北国の気概と風情である。



奥羽越現氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始め、東北好きである。

撮ったりして賑わっていたのである。何故ここに鶏が居るのか・不思議に思いつながら場を後にしたが、その後参拝に訪れる度に彼らに出喰わす事になった。神社に鳥というと、半ば当然ながら神域の境界を示す門「鳥居」を想起する。鳥居については、その起源として天照大神を天岩戸から誘い出す為鳴かせた鶏の止まり木とする説が知られ、現在も伊勢神宮や石上神宮など「神使」として境内に鶏を放し飼いにしているお社も少なくないようだ。八幡宮を象徴する鳥として知られるのは鳩で、特に、鳥居の扁額に彫られた「八幡宮」の「八」の字が二羽の鳩に描かれている八幡宮は多いと言われる。他にも八幡宮といえば「戌亥」年生まれ守護神とされる事が多く、様々な動物との関わりが見られるのだが、当社の場合、鶏との所縁はどうも一般とは違うようなのである。本稿では一見あまりにも有名な大社に秘められた謎に焦点を当て、東北の神社が持つ知られざる反骨の記憶に迫ってみたい。

橋の欄干に、夜な夜な金色の鶏がとまって高らかに鳴いては飛び去っていくという事があった。何か不吉な前兆かと大崎八幡宮を訪れた町の人は、その頃奉納されていた見事な鶏の絵馬から、ある夜に鶏だけが抜け出して橋を指し飛んでいくのを目撃。これはいかんと金網で絵馬を封じたが、その後未曾有の大雨から洪水が起きて死者も出た事から、人々は鶏が災害を警告する為出現した八幡神の化身だったのだと知り、深く反省したのだという。

宮城県多賀城市では「仁和多利神社」と書く。祭神は武内宿禰命。縁結びで知られる仙台市泉区の二柱神社は、別名を「仁和多利大権現」といっているのだらうか？

以上でわかるとおり、同名でいながら異字であるだけなく、祭神までがバラバラに異なっているという極めて異例な神社である。推測できる事は、多彩で脈絡がない祭神名は、基本的に後付けされた存在であり、もとは何らかの共通した信仰対象であった可能性が高いという事。

青森・秋田両県には見られないながら、岩手県から千葉県までの広範囲に分布(特に福島県内に集中)する事から、蝦夷関連(それも朝廷に対応した経験のある地域)の土着信仰が関係している線が濃厚である事。つまり、アラハバキとは違う形でその正体を隠し、土着信仰を守った神社である、という事だらうか。

さらに、この炭焼藤太という名は、俵藤太と呼ばれたと伝わる藤原秀郷がモデルではないかという説がある。言わずと知れた、平泉藤原氏や信夫藤原氏の祖でもあるが、まさか平泉より五代も前の秀郷から既に陸奥の黄金に関わっていたという事だらうか？

金成の畑という地名は渡来氏族である秦氏に由来する可能性があるが、実は秀郷も秦氏の娘を妻にしている。秦氏といえは、炭焼藤太の子・金売り吉次の京都での屋敷があった「首途八幡宮」は西陣地区にあり、秦氏が伝えた西陣織で知られた地である・等々と考えていたりますますわからなくなるので、話を戻そう。

しかも、まだまだ腑に落ちない。そもそも、「にわたり」とは鶏の事ではなく、アイヌ語か何かで別の意味を持つ名詞ではないのか。そういうえば、アラハバキ神社は境内の主神の座を奪われ、末社などに祀られる例が多いが、にわたりの場合は二柱神社のようにあくまで主神のまま名を変え、別名・旧名として記憶されている。つまり、祭神のみならず神社名すらも重要ではない、という事なのか。実は、現存する国内の神社は大きく「氏神型信仰」と「勧請型信仰」に分ける事ができる。氏神型は古来の伝統形式で、血縁や地縁による組織で氏神・地主神を祀る型である。もともと神社とは個人的な祈願をする場所ではなく、五穀豊穡などの為の共同体祭祀の場などで、祭神の名や霊験・ご利益などはあまり視野になかったとも言われている。個人的祈願やご利益は個人救済を唱える仏教の影響とされ、またそうした霊験を持つ大社の分霊を行い、全国に同名・同系統の神社を広めていったのが現在主流ともいえる勧請型である。

私が現在の「地元の神」として愛着を深める大崎八幡宮、その境内に住む鶏たちは何を語りかけようとするのだらうか。伊達政宗による創建時、臨機応変たるニワタリの神との、何らかの約束が交わされた可能性を、その伝説や境内に遊ぶ鶏たちの姿に見るのである。

東北で鶏といえは、もう一つ思い当たる事がある。かつての奥羽の都・平泉において、無量光院の背後に聳えたとはい金鶏山。奥州藤原氏三代・秀衡が山を人工的に築き上げ、平泉の守護を祈願し雌雄一対の金製の鶏を埋めたと伝わる。これは藤原氏による仏国土としての平泉の重要な装置と解釈されるが、実はこの「金鶏を埋める」という行為は特殊なものではなく、長野、岐阜、奈良、三重ほか全国にある金鶏伝説に見られる。山や塚に埋められた金鶏が元日などに地中から鳴くというのだが、特に東北では宮城県北部・

金成の畑地区にて、砂金で富を得た「炭焼藤太」が山に金の鶏を埋めたという伝説が知られている。炭焼藤太は源義経の奥州入りで手引きをした金売り吉次の父と言われる人物で、平泉との関わりも深いのだが、実は後年秀衡が埋めたという金鶏は発掘されず、金鶏山は経文が埋められた経塚であった事が判明した。その反面、伝説と思われた炭焼藤太の金鶏は現実に発掘され、しかも藤太伝説は宮城だけでなく全国各地にあつて、隣山形の寒河江市でも金鶏が発掘されたというのである。何やら、途轍もないミステリーの迷宮に嵌まりそうではないか。

また、日本地名研究会の三文字孝司は主張する。「大崎八幡宮は、以前はニワタリ神の神域だったに違いない」と。突如登場してきた、聞き慣れない神の名前。実は、宮城のみならず周囲の東北・北関東各県に広く分布する、その名も『にわたリ神社』という、謎めいた社の主神なのである。

東北や関東で謎の神社といえはアラハバキ神社が思い浮かぶ。偽書とされている『東日流外三郡誌』に取り上げられ、高橋克彦が小説で題材にしている事でも有名になったが、「にわたリ神社」はほぼ全くメディアに注目されず、関連書籍もなく、各地の地元民がひっそりと信仰してきた、それでいてその正体はほとんど知られていないという不思議な存在である。しかしインターネット上では各地で強い関心を示し、研究を続けている人々の存在が確認できる。それら様々な識見の中から、興味深い点を摘み上げてみよう。

「にわたリ」を守り続けた、その一点である。そこには、祭神・霊験にこだわらない縄文信仰を基にしたDNAを感じさせるものがある。にわたリ神社の謎は調べれば調べるほど深まるばかりであり、その究明の旅は始まったばかりのようにも思えるのである。

明治維新後の廃仏毀釈により各地に散在する「雑多な」神社の統廃合が行われ、地方独自の社が国家の認める神話上の神にすり替えられた。これらの歴史的要素から、にわたリ神社の謎もある程度解けてくるように思われるのである。つまり、各地の「にわたリ神社」の祭神が一定なバラバラなのは国家による押し付け、あるいは神社側の方便であり、逆にそれだけ祭神名にこだわらない側面は、この神社が古来の「氏神型信仰」を維持してきた事を示している。しかし尚も残る謎は、国家に対する方便として祭神を据えながらも、神社名そのものは当て字を異にしたが、地方のコミュニティと自立性を崩壊させ、現代にも続く中央への依存体質と「地域の衰退」の遠因ともなってきた。ならば今こそニワタリの復権が、東北復興の鍵とならぬとも限らない。

また、明治維新後の廃仏毀釈により各地に散在する「雑多な」神社の統廃合が行われ、地方独自の社が国家の認める神話上の神にすり替えられた。これらの歴史的要素から、にわたリ神社の謎もある程度解けてくるように思われるのである。つまり、各地の「にわたリ神社」の祭神が一定なバラバラなのは国家による押し付け、あるいは神社側の方便であり、逆にそれだけ祭神名にこだわらない側面は、この神社が古来の「氏神型信仰」を維持してきた事を示している。しかし尚も残る謎は、国家に対する方便として祭神を据えながらも、神社名そのものは当て字を異にしたが、地方のコミュニティと自立性を崩壊させ、現代にも続く中央への依存体質と「地域の衰退」の遠因ともなってきた。ならば今こそニワタリの復権が、東北復興の鍵とならぬとも限らない。



大崎八幡宮、冬の夜の祭で人々を見守る鶏たち

シリーズ 遠野の自然

「遠野の清明」

遠野 1000 景より



ニホンカモシカご夫婦で



ユキワリソウ

四月になったというのに全国的に雪に見舞われた。気温も冬に逆戻りで、東京でも一桁の寒い日々となった。当然ながら、北国の桜前線は突然停滞してしまった。

これから咲こうとしている桜のつぼみに雪が積もる景色はめつたにないが、今年はこちらで見られた。遠野では、氷点下の日もあったようだ。写真のように、これから

咲きはころうとしたところ、突然雪に埋もれた花々はきつと驚いていることだろう。他方、春になり動物たちも姿を見せる。ニホンカモシカの夫婦やリスたちは春が待ち遠しいであろう。



キネズミ (リス)



淡雪



芝焼き



雪中クロッカス



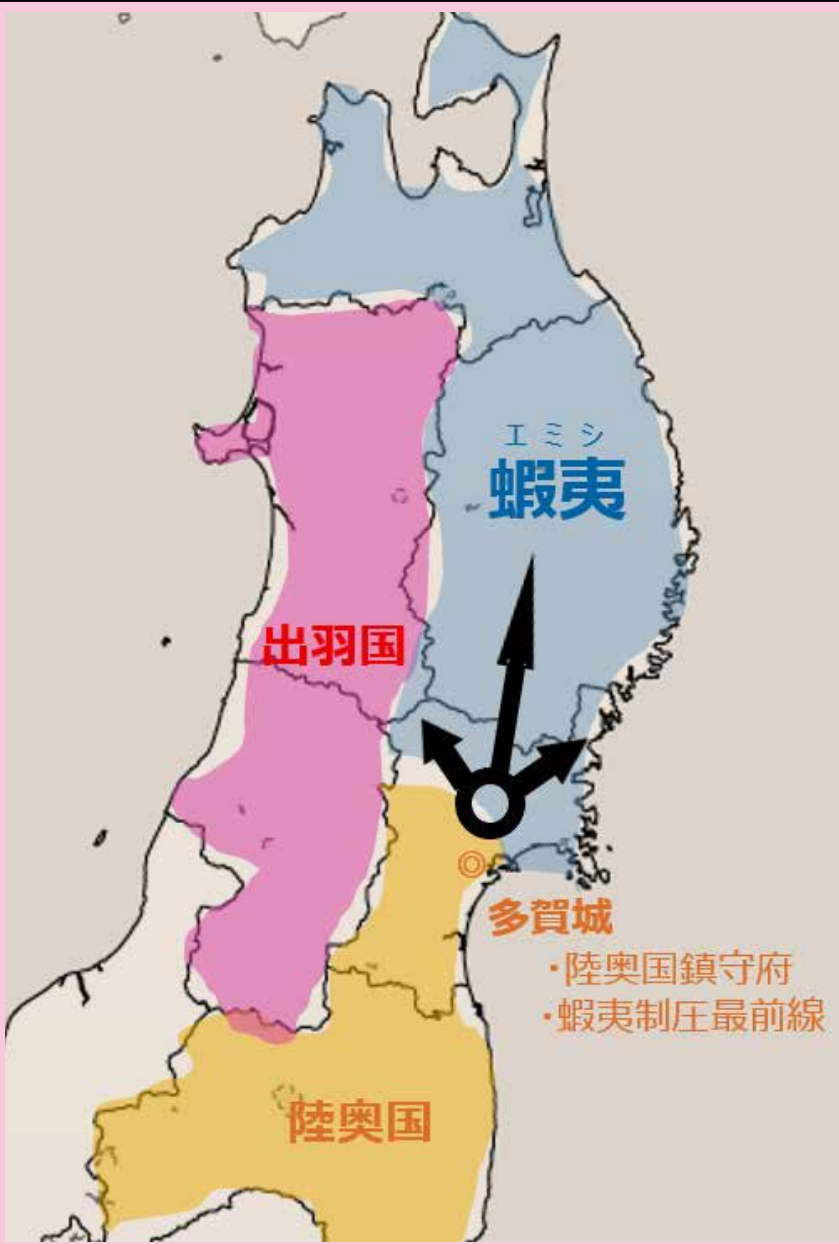
春雪



雪中フキノトウ

2作目の映画 企画開始

もう復興を目指す段階ではない 『東北再興』のひとつの可能性提示



一作目の映画のエンディング画像

一作目の映画が完成して、三月末に上映したばかりであり、また、東京上映会を五月六日に予定している状況ではあるが、どうしても次の作品を製作したい気持ちを抑えることが出来なくなってきた。

左の画像にもあるように、一作目のエンディングは、大和朝廷がさらに北上して、まさに支配地域を拡大しようという場面であった。

そうならば、次の展開を考えるのは当然であり、そのため、二作目で、北上後を描く映画製作は自然の流れである。

一作目の映画上映後に新聞の取材を受けたが、そこで二作目の構想を話した。

有言して実行ということ、外部に宣言した以上、やるしかないという立場に自分を追い込んだ。(新聞記事参照)

そこで、岩手県南部を主な舞台とした2作目の映画企画第一弾をまとめてみた。

まだまだたぎりの段階であり、公表は出来ないが、一作目の舞台が宮城県北部の涌谷町、二作目で北上して古代激戦の地である岩手県南部に移動することになる。中身はまだこれからであるが、古代の歴史に関連はするが、現代の課題にも思い切り斬り込んで行きたいと思っている。

【東日本大震災に関連して】東日本大震災ショックから脱出もできていないし、克服もしていない。「大きな宿題」は未解決のままである。

一作目の完成目途がつき始めてから、徐々に二作目の構想に取りかかっていたのだが、単なる歴史だけを取り上げるものではなく、これからの東北、復興後の東北を前面に押し出した映画にしたいと考えている。そうした大きな構想ではあるが、実現はそう簡単ではないと覚悟している。しかしながら、あえて挑戦していくこととした。

その発想は古く時代によって空白となり、従来の価値観が跡形もなく消滅したが、あれから八年間、その答えを求め続けてきたが、いまだに何一つ見つかっていない。あのときの無力感、精神的空白、価値観喪失、あれを簡単に忘れるようではこの国の未来は危うい。

【現代日本の文化と生き方について】いまの日本の浮き草のように浮ついていて、漂ってばかりで、根っこを下ろさず、地に足のついていない文化は空虚だ。そしてその中で暮らす人々も落ち着きなく、漂っていて、生きている実感が薄い。

【歴史の再出発】東日本大震災により、今から千年以上前の貞観大地震と貞観津波が話題になったが、もう少し時代を遡ると、具体的にはいまから1300年前後、いまから1400年から1200年前までの200年間がこの国の分岐点である。そこで大きく誤った針路選択が見えてくるはずである。長期スパンで歴史を眺めると、この国が犯した大きな過ちがはつきり見えてくる。その過ちは一つではないし、けつして小さな規模のものではない。そこから再出発しなければ、未来もない。その大きな過ちの主たるものは、戦争の導入と、その戦いを支える文化の導入だった。

【これからの地方】地方の衰退が言われているが、過疎とは、逆に迅速に変化が可能ということだ。この国の開始が、渡来人の大量移住と水耕稲作とそれに伴う諸々の文化が輸入された時代から始まったというムーブがこの百年以上に亘り支配している。それはまったくの誤りだ。この国の文化はもっともっと古い。

【目指す理想的な文化】壮大な近代の幻想である進歩思想を捨て、三千年を越える歴史と連続と続く祖先からの命の継承を考えてみる。



大崎タイムスの上映後記事